小説

昭和改訂版

外 二

特258
701

始

特258
171

小督

（梗概）高倉天皇の寵妃小督の局、相國の息女たる時の后を憚り、嵯峨野の奥に身をひそめ給へり。されば帝いたく嘆かせ給ひ、彈正の大弼仲國をして小督の在家を尋ね參れとの宣旨を下し給ふ。仲國畏り時しも仲秋明月の夜御琴のお馬に鞭を上げ、嵯峨野の方にて只片折戸しる家ざりゆかを知るべは尋ね行きしが、さる賤ヶ家より想夫戀の曲を彈する琴の音ぞ聞ゆるは曾て殿上にて御遊の御時聞き知れる小督の局の調べなるより、仲國おち喜び直ちに御諚の趣を傳へぬ。局は直の御文を拜して涙乍らに甘泉殿の古事など語り、やがて御返事を認むる間仲國は舞をまひて局を慰めなどしやがてこの趣を復命せんとて名殘を惜みつゝ都をさして歸り行きけり。

昭和三年一月三日 帝國圖書館

シテ　源仲國
後シテ　同
ツレ　小督の局
トモ　小督の侍女
ワキ　臣下
所　前 京都仲國の館　後 山城國嵯峨野
季　秋

小督

詞　昆ハ言金院ヨ仕ヘ奉ル臣下也。扨モ小督ノ局ト申テ君乃御寵愛ノ比方ナ比ナ中宮ヨリ召シ相國ノ比ノ息女ヲ召レ世ノ様ヲ見ケルニ小督ノ局クレヨリ出ヒ君ノ寵限リ無シ

上
妻ハよる北おとゝ入世弥ひ東ハ又南
殿乃床よ明さ世弥ひ北よ小猪乃
屋北ハ行南嶋ハ家里の方ハ屋ハ中
君学百及ず世弥ひ弾正大弼仲國
を百魚ハ行南を見ゝ系れとの
宣旨よ但せ式由仲国よ中付ずやと

我こんじハいの有仲國のまゝりハら
して仲國とハ誰よゝ誰ゝ波里ハぞ
わき
芝ゝ宣旨よて上掃ゝ小猪北屋の北
行南さゞ北ゝ寸ハ屋ハよ君学
百及ず世弥ひ魚ハ行南を尋て系
まゝとの北事よゝくハ して宣旨ハ出て不ハ

扨さらみてもいう程なる不と吹石及ばぬ
弱ひくひぞ　わき　兵庫拍子さる不と
だらぬ吹石及ばぬ弱ひくひ　して　実と
踏ゞ屋よハ庫打戸と中掛北ひ球更今
実もハ月十五実名月の夜よてひ程
よ　上　琴ひき弱ハ扨事あらじ　小猪乃

局の庫ちくへをバよつく吹ちりてひ程
よ　上　只庫ひ乃くひ吹きひへと　弓上　あく中上
ひれバ　わき　山中養閑中ひまぶ　清蔵乃
餅り　ふくも　寮北清馬弱るなり
時の面目　ヨ上　ちく出るや秋
乃夜北　歩　月もの弱よひして重羽

よりけきこ時乃まもゝ名ぐんの彩霞ゝ流
ミヒンヤ　つまサシ　禾上
〈中入　実や一指の陰よやどり一
河の流きを汲事も多生乃孫ぞと
写物浅白地なる事るぐゝ刈て荷ふ
写彩の子ゝ丹ぶ俊りふ陸の女乃めよ弟
きなるゝ世のるひあゝぬ人の心弐

いざゝはゝぶ琴の吉よたてゝも丹ぶ
ゝゝゝ上　せめてやきゝ慰むとゝ〈
はゝひ　せめてやきゝ慰むとゝ〈
ゝ丹るゝとゝ此おのづゝ秋風ふたぐへぞ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
唱虫の声も世しみ此秋やうゝむる意
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やう丹何をゝく移る女郎花乃も夏
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世のさゞ此牙そ人よりゝる此乃移も

なかりしや　あら面白の折からやな
三五夜中の新月の色　二千里乃外も
遠からぬ　叡慮畏き勅を受て心を
いさむ駒のあしなみよるのあゆみこそぞん
せよ　牡鹿なく此山里と　ながめけん
さがのゝ方の秋乃空　さぞな心もすみ

渡る片折戸を志るべにて名月に鞭を
あげて駒をはやめ急がん　賤が家居
あまた里なれど　もしやと思ひ宿のし
こゝに駒ひかへよせしくてむらくし宿せば
聞てひく人はなかりけり　月にやあこがれ
出給ふと法輪に参れば琴こそ聞へ

きよらなれ（ウル）巖の嵐ら松風らそれら何ら
ぬら易ぬる人北理その吉ら（ネ）がくハ（ヤヲ）何ぞ
と（ト）宣（ヤヲ）れバ（ヤヲ）吏を呼ひくこ（ヤ）ふる名の吏（ソヲフ）
こ（シ）ろなるそ嬉しき　して
牧ひもるに小潜
北局の出ちくにくひ（ヒ）て楽内を中
さくふぎるにてひ（ヒ）出ん出戸あけさせ給へ

つま
たそや門（カド）ら人音のきるに出て宇佐
らへ　中（トモ）くふとらく思ひくあしら星
るんと出ん出とぞそを推（オシ）ひらく　して上門（カド）
さてきてハけふまじとぞそを推へ内
に入（リ）見る宣旨の使仲國見まで
糸りよりハ出中落ふべし　つま
ら法く

るやうるいやしきみぶ[illegible]家に何ゝ宣旨
のゆべき門さぐへまてまし酒まそう　いや
いろ丈ぞ世路ふ年ぞ人めぢみも酒乳
出る神ゝ法のむ現そ乃ちくへハ酒きおゝ
掛を　実ちづらしや仲國ハ殿ゝ神
遊ゝ形くハ　笛佳きと名出されく

つき
刻し重井の月もうハ人もとひき
てあひまあふ生糸竹乃よる北ゝえ
同ト
ひそうふ法くん中せとゝ北勅宣をば何と
とゝロ
さハ酒ふや中塩の澤ゝ下よゝし
ヤヲハ　ムグラ　タ
法くバ今宵ゝ月しきの袖ふきて月み
ヤヲ
ぬきん　上
歩　所をちるゝ嶋の山ゝ

御幸絶にし語らゝ手世のふる所と
どりこし行幸を君の恵ぞと申しき
情の色香をも知る人のこそ花鳥の音
みずみたてよ楽屋乃あるじはいさ知らず
知らへはらくまことよもあらじ　仲忠は
目にかゝらざらん程ハ帰る間敷とて何此

業垣此女小露語よ志存まて修入仙勅諚
と申いふしさといひ何とも思だせ給
ふべきことゝえやいまきたてはふれたん
実に我もさゆうふまとへ共余り此事
乃らん乱まよ身此座所も志る稀だけるば
こなたへと申侍らん　さらば仲忠は付す

へ出給りて　して　仏はてゝ勅宣の旨を
世に中上ゆべし　掬もく〳〵拾よ　なく世
給ひて後ち　玉体を裏へ入給ひ悩ましく
見へさせ給ひゆ程　せめて此事ふ　上　は
紛涙を落て給れとの宣旨を蒙り
涙くも滝書を給つゝ　是を拾給
て　下　ひ　れ　る　ゞ　ゞ　直　世　此　君　事　を　給　り　ゝ
妻　中　し　中　ゆ　ん　つ　世　下　女　より　も　示　る　う　里
し　出　世　ゝ　及　び　な　き　身　の　紛　御　まで　も
彩　む　ん　此　水　世　の　泣　き　へ　ふ　き　出　情
同　下　う　ゝ　ぬ　ゞ　げ　ハ　雲　井　より　牡　球　る　才　此　露
の　世　を　悩　乃　仏　ゆ　ゝ　と　ふ　て　そ　涙　成　き　れ

クリ

うつゝやとはまことぞ身に白玉のをのづから
ながらへて憂き年月をうましかりなる
住居の形　たとへを志るも数ならぬ
身には及ばぬ事なれど　妹背の仲は唐
どそるに彼漢王の宮居も甘泉殿の
よるのよひ寝ぬんや絶の火のたゞふりふ
致る侍るを　見しは程なき名乃をを
中ころなりし契りの形　唐帝の古へをや
驪山宮の私語も　もれし初めをも漏るなあ
だなる露の浅茅生や袖に朽ちし
秋乃霜忘れぬ夢をとふあらしの風
の伝まで身に志めるきつゝろるなまなり

つまと上ゝ
人の國とゝふひ乃　月ハ　見をとゝれば者
る〳〵なき世をとゝひの数とゝあまを
まりなきこゝ地をくゝ知てと弥堪乃
こゝ地ハ　社ハ　こゝ地
こゝ地ハ　社ハ　こゝ地
同じよの秋とゝもゝ的の月ハ秋の外
とゝひ哉ゝ世よりゝ侍ハ者らいとも者き

動なれバゝ宿ハとゝれてゝるしとゝも如ゝ
よゝん　して上ゝ　ゝ者とゝなりやはゝバとて直乃
お見ゝ弱り恋暗中ゝ立ゝ　月り
とゝふゝ宿りゝ仮のゝ宿ハ世よ者ゝ沼りの
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
沖ゝ使ゝ者ゝ出ハ名ゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
流ゝ船　上　して　涙ゝもよしゝや星ゝ合の今ハま

れなる中るりと　孫ふ逢漕ち

紅あらし　月下　むらへ北舟車の紅て下紅

糸くめといへど名残の心とて　引て上に　酒富

をなして糸竹乃　月　あうさそこ渡る月

黄うる　月黄よし　上に　水ぐくしふ

吹あ笛めるる笛北吉るを　引とぐむべき

とと北義もなしくとのさもおし

おとのさそなきこ君の恨心　月　我ぐ身

とそを拍ひよ立まふべくもあくぬこて

乃今ハ陶りく嬉しさを何よつくまん

夜衣ゆくうよ袖歩あ笹路中急ぐ

心をいさある詞ふ由くり里と歩ふ人影

昭和九年八月廿五日印刷
昭和九年八月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地
著作者　寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者　江島伊兵衛

發行所　下掛寶生流謠本刊行會

著作權所有

終